

近世日本における庶民の「蝦夷地」像：刊行図と節用集所載の地図を中心として

米家, 志乃布 / KOMEIE, Shinobu

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

72

(開始ページ / Start Page)

131

(終了ページ / End Page)

146

(発行年 / Year)

2016-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012764>

近世日本における庶民の「蝦夷地」像

— 刊行図と節用集所載の地図を中心として —

米 家 志乃布

I. 序

(1) 本稿の目的

本稿の目的は、近世日本における庶民の地理的認識としての「蝦夷地」像がどのようなものだったのかを明らかにすることである。その際、最先端の地図を作製することのできた江戸幕府による蝦夷図や一枚物の手書き図から述べるのではなく、江戸時代の庶民層の多くが目にすることができた刊行図および節用集所載の地図を素材とする。

利用する史料は、庶民の日本像・世界像に最も影響を与えたと思われる一枚物の刊行図（蝦夷図および日本図の蝦夷地部分）あるいは節用集所載の地図である。つまり、作製側の意図する「蝦夷地」像のみではなく、地図の需要側の「蝦夷地」像を想像し、江戸幕府や知識人層と庶民層の地理的認識の違いについて言及する。

「蝦夷地」を描いた地図の歴史に関する先行研究は数多くある（船越 1974，秋月 1999，高木 2013 など）。それらの研究では、手書き図や刊行図の区別なく、蝦夷図としての作製発展史を述べることに中心が置かれている。しかし、近世日本社会における地図の発展史を述べるうえでは、地図の社会への流布や受け手側の地域像に与える影響を検討することは重要である。このような点については、従来の研究では重要視されていない。

今後は、従来の「蝦夷地」の地図史研究において明らかにされている作製側の地理的認識のみではなく、それを手にした需要側の地理的認識についても考えていく必要がある。それゆえ本稿で

は、一枚物の刊行日本図における「蝦夷地」および節用集所載の地図における「蝦夷地」の表現に注目し、近世の庶民層にとって身近にあり、かつ容易に受け入れられたであろう地図を分析対象とする。

この論点に関わる先行研究としては、上杉和央（2007・2015）が、一枚物の刊行日本図や様々な日本図・世界図の日本部分の歴史をもとに江戸時代を通じた日本像の変化を論じている。また、ボロヴニコヴァ（2013a・2013b）の研究では、近世節用集の付録の世界図や人物図を素材として、近世庶民の世界像や自他認識を明らかにしており、本稿の問題意識と共通する。しかし、いずれの研究においても、日本の「異域」である「蝦夷地」像と日本像や世界像との関係についての検討は行われていない。

(2) 地理的認識としての「蝦夷地」

現在の「北海道」は、明治 2（1868）年の開拓使設置まで「蝦夷地」と呼ばれる地域だった。「蝦夷地」とは「蝦夷（人）」が住む地域という意味である。ここで注意しなければならないことは、「蝦夷」とは、大和政権から見た異民族集団としての「他者」であり、あくまで「和人」側の呼び名であることである。つまり、「蝦夷地」という地名は、「他者である異民族の住む地域」としての和人側の地理的認識を示したものである（米家 2015b）。

この「蝦夷地」の範囲は、江戸時代を通して一貫していたわけではなく、2 度の江戸幕府による上知での変動があり、また様々な著作においては

(現在の)北海道だけでなく樺太・千島列島を含む場合もあった。しかし、「蝦夷地」という地理的認識としての地名が存続する限り、その地はあくまで異民族である「蝦夷」の土地であり、日本の国土ではなかった。「蝦夷地」が「北海道」という地名に変更され、名実ともに日本の国土に編入されたのは、明治政府の開拓政策によるものである(米家 2015b)。

「北海道」の「道」という呼称には、古代日本の五畿七道に付け加えられた八つ目の「道」という意味がある。樺太と千島列島は、明治2年には、それぞれ樺太州、千島州とされ、北海道を構成する州(国)となった。北海道には、本州以南と同様に、国郡制が導入され、11国86郡が設定されたのである。日本の北方に位置する「蝦夷地」を、日本の国土の一部である「北海道」に組みこむ以前から、江戸幕府は、日本図のなかに「蝦夷地」を組み込んで描く試みを行っていた。この直接の契機は、それまではそれほど強く意識していなかった異国ロシアの存在である。18世紀後半になり、ようやく日本はロシアという異国を認識し、それによって「蝦夷地」への関心が高まり、江戸幕府による「蝦夷地」内国化へと進むことになる(米家 2015b)。

それでは、江戸幕府は、「国地」(=日本)と「異国」との境をどのように認識していたのだろうか。寛政年間以前は、明らかに「蝦夷地」は「国地」ではなかった。しかし、第一次直轄期以降、「蝦夷地」は「国地」に組み入れられ、「蝦夷地」の外側に「異国」(この場合はロシア)が存在するという認識に変化する(谷本 2015)。つまり、江戸時代を通して、「蝦夷地」の政治的な位置づけは不変ではなく、その政治的な立場にもとづいた地理的認識は、直接に地図の表象にも表れていた。江戸幕府作製の日本図としての「伊能図」における測量された「蝦夷地」が、まさにそれを表現していた(米家 2015b)。そして、この「蝦夷地」のかたちは、明治2年の「北海道」改名以後も生き続ける。

しかし、江戸幕府の蝦夷地政策による地図作製

は、同時代的には秘図とされ、一般には流布しなかった。これは、シーボルト事件による高橋景保の処罰やシーボルトの国外追放にも波及した(織田 1974)。「伊能図」に見られるような最新の地図情報は、同時代の刊行地図においては見られず、あくまで前時代からの「蝦夷地」表象が生き続けているケースも多かった(米家 2011)。つまり、当時の北方フロンティアであった「蝦夷地」をめぐる権力側と庶民側の地理的認識には差異があったことが想定できる。

Ⅱ. 一枚物の刊行地図からみた「蝦夷地」像

近世日本は、民間刊行の地図が数多く出版された時代である。幕末には出版技術の発展により、刊行図は庶民レベルまで普及した。このような刊行図は、世界図・日本図・都市図・旅行案内図など多岐にわたる。本章では、代表的な刊行日本図および刊行蝦夷図における「蝦夷地」の描かれ方を確認する。

(1) 刊行日本図にみる「蝦夷地」

まずは、どの日本図の歴史に関する先行研究(秋岡 1955, 織田 1974 など)においても、日本最初の刊行日本図として紹介されている慶長12年(1602)に出版された『拾芥抄』の「大日本国図」を確認すると、そのなかに「蝦夷地」らしき記述や島は存在しない。また、一枚物の刊行日本図として最も古いものとされる「南瞻部州大日本国正統図」の本州部分のもっとも東側には、「夷地」という記述が確認できる(秋月 1999)。しかし、この「夷地」は本州の一部に地名として書き込まれているのみであり、独立した島らしきものはない。このタイプの日本図は他にも確認できる。

一方、朝鮮で1471年に申淑舟によって出版された『海東諸国紀』のなかにある「海東諸国総図」の本州北側には、すでに「夷島」という独立した島が描かれている(秋月 1999)。これが世界で現存する「蝦夷地」を描いた最初の刊行図とされて

いる。この『海東諸国紀』の日本部分は、おそらく日本で描かれた「行基式日本図」を模写したものであると思われる、島のかたちをした「夷地」が日本で作成された日本図のなかに描かれていたといえる。つまり、近世初期までには、本州の一部に「夷地」と書き込む場合と、本州の北東側に「夷地」という独立した島を描く場合と二種類の日本図があった(米家 2011, 米家 2005b)。

まず、17 世紀後半の代表的に刊行日本図における「蝦夷地」を確認する。寛文 2 年(1662)の「新改日本大絵図」では、「松前」「てしおふろ」「めなしふろ」「ゑぞのちしま」と記された大きな陸地が地図の東端に横たわっている(米家 2011)。この地図は「扶桑国之図」とも題されており、他にも寛文 2 年の二種、同 5 年、同 6 年の刊行図の現存が確認されている(秋岡 1955)。このタイプの日本図はいわゆる「扶桑国図」系統の刊行日本図として多くの版が確認される図であったとされ、やはり「行基式日本図」のかたちを残している。また「日本」の周囲には、架空の土地である「雁道」「羅刹国」なども見られる(秋岡 1955)。

続いて、刊行日本図として有名な二人の作者による日本図に注目してみよう。先行研究において「近世前期の流宣図」「近世後期の赤水図」と称され、17 世紀後半～18 世紀にかけての刊行日本図の代表作とされる石川流宣と長久保赤水が作製した日本図である(織田 1974, 金田・上杉 2012, 上杉 2015 など)。

石川流宣の代表的な日本図である「本朝図鑑綱目」(貞享 4 年(1687))あるいは「大日本国正統図」(宝永 5 年(1708))は、「松前」が本州と「夷狄」の間の小島として描かれている。また、同じく流宣の「大日本国大絵図」(宝暦 3 年(1753))と「日本山潮陸図」(元禄 4 年(1691))では、「夷狄」と「松前」が陸続きの島として、地図の北東の端に描かれている。この場合、いずれにしろ、「夷狄」(「蝦夷地」のこと)と「松前」は別々に表現されており、つまり松前藩の領地である「松前地」と「夷狄」の領域である「蝦夷地」を区分して描いたものといえる(米家 2015b)。

この「流宣日本図」も「扶桑国図」と同様に、「行基式日本図」のかたちを残しており、さらに架空の土地である「羅刹国」が描かれている(米家 2015a)。

次に、長久保赤水による代表的な日本図として、「改正日本輿地路程全図」(安永 8 年(1779))と「改正日本輿地路程全図」(安永 8 年の改訂版、寛政 3 年(1791))を確認すると、渡島半島の南端部分は描かれており、その上に「松前」やその周辺の地名の記載がある。しかし、いずれも地図上に「蝦夷地」らしきものは存在しない。この描かれ方は、幕末まで続く「赤水系日本図」(赤水の日本図の影響を受けた刊行日本図)も同様であり、新しい情報は更新されないまま、出版が続いていたものと思われる。ただし長久保赤水は、日本図とは別に「蝦夷松前図」(寛政 7 年(1795)頃)を出版しており、それは当時の幕府による最新情報を反映させた地図であった(秋月 1999, 米家 2011, 米家 2015b)。これらの地図では、明治期になるまでの間に、日本図に「蝦夷地」の情報を付け足して発行される改訂版・模倣版も出版された。特に、嘉永 6 年(1853)からの江戸における蝦夷図発行ブームにより、それらの情報をもとに、従来の日本図に新たに「蝦夷地」を書き加えて出版したものも存在する。しかし概して、赤水日本図のように、日本図の端に「松前」のみを記載しているものは続き、「新刻大日本路程全図」のように江戸・大坂で 7 名もの版元が出版している人気の日本図においても、従来の「赤水系日本図」にある描き方は、版を重ねての変化はなかった(米家 2011, 米家 2015b)。

しかし、幕末にはこれらの刊行日本図とは別に、独立したものとして刊行蝦夷図が数多く出版されたため、これらの刊行蝦夷図で表現される「蝦夷地」のかたちがどのような特徴をもっていたのか、確認する必要がある。

(2) 刊行蝦夷図と「蝦夷地」のかたち

近世日本における代表的な刊行蝦夷図といえば、天明年間に刊行された「蝦夷国全図」である。天

明5年(1785)に江戸で出版されたこの図の作者である林子平は、江戸在住の仙台藩士であった。江戸知識人のネットワークを通じて様々な蝦夷図や外国製の地図などを参照して本図を編集したという(秋月 1999)。おそらくこの図の「蝦夷地」像は、多くの知識人層に影響を及ぼしたであろう(米家 2015b)。

しかし、ここに描かれた「蝦夷地」のかたちは、現在の北海道部分が縦長に不正確に描かれており、江戸幕府からの最新の地図情報を得ていたとはとても言い難い。前述の長久保赤水の「蝦夷松前図」のように天明年間の幕府の蝦夷地調査の影響を受けた地図とは異なり、おそらく当時民間で流布していた別の系統の蝦夷図から影響を受けていたと思われる(秋月 1999)。当時、天明8年(1788)に奥羽・松前の巡検使に同行した古川古松軒は、その時の紀行文である『東遊雑記』のなかで、林子平の地図の不正確さをたびたび批判している⁽¹⁾(古川 2003)。

このような単独の蝦夷図については、他にも文化年間の刊行図や松浦武二郎の刊行図なども数点存在するが、それまでとは比較にならないほど多くの出版が続く、刊行蝦夷図の隆盛を迎えたのは幕末であった(高木 2011)。

主なものを挙げると、嘉永6年(1853)江戸の愛我山房から刊行された「満州魯西亞疆界図」、嘉永7年(1854)江戸の播磨屋から刊行された藤田良の「蝦夷闔境輿地全図」、同年刊行の結城甘泉による「蝦夷地理之図」、同年刊行の新発田収蔵による「蝦夷接壤全図」、安政2年(1855)に仙台藩士の学者である小野寺謙が作製した「蝦夷海陸路程全図」、同年に江戸の春樹堂から刊行された「蝦夷地全図」などがある(秋月 1999, 三好・小野田 2004, 高木 2011 など)。

秋月(1999)は「これらの蝦夷図は流行に乗って大急ぎで刊行されたものが多かったために、それまでに達成された地図作製の水準を示すものではなく、手持ちの旧図をそのまま、あるいは他の地図と突き合わせて木版にしたもの」と述べている。そして、天明年間以降の蝦夷図を参照し、蝦

夷地の輪郭(かたち)をもとに、六つのタイプに分類している。具体的には①「文化期実測図」型、②「実用蝦夷地図」型、③「加藤図」型(「実用蝦夷地図」旧型)、④「天明年調査図」型、⑤「欧州図」型、⑥その他である(秋月 1999)。

この秋月の分類はあくまで従来の蝦夷図の発展史から分類しており、筆者は、ここで新たな尺度として、(A)江戸幕府系の地図情報を反映させた地図、(B)実測図ではない民間系の地図、(C)外国製の地図情報を反映させた地図、という三つの分類を導入した(括弧内の①～⑥は秋月(1999)による分類)。その結果、(A)嘉永6年「満州魯西亞疆界図」(①)安政2年「蝦夷海陸路程全図」(⑥)安政2年「蝦夷地全図」(④)、(B)嘉永7年「蝦夷闔境輿地全図」(②)嘉永7年「蝦夷地理之図」(③)、(C)嘉永7年「蝦夷接壤全図」(⑥)となった。

これまで、幕末の刊行蝦夷図は「過去に作製された地図の複製もしくは総合」であり、この時期の「新たな測量の結果ではなかった」ため、地図の発展史という点では、それほど重要視されない地図群であったといえる(秋月 1999)。実際、おそらく当該期にもっとも刊行部数も多く、世の中に出回った刊行蝦夷図のひとつである藤田良が作製した「蝦夷闔境輿地全図」に描かれた「蝦夷地」のかたちは、近藤重蔵が作製した地図や「伊能図」のような江戸幕府系の地図に見える「蝦夷地」のかたちではなく、岬や断崖が強調された扁平なゆがんだかたちである(図1参照)。

Bの分類(秋月の分類では②③)の地図は、基本的に、江戸幕府系の実測図などの「蝦夷地」のかたちを模写せずに、各用途に応じて独自に発達してきた「実用蝦夷地図」型(秋月 1999)であり、民間の需要の大きかった刊行図であるといえる。つまり、庶民層が「蝦夷地」という「日本」ではない異域のイメージを抱くうえでは、特定の人物しか閲覧できなかった江戸幕府が作製した蝦夷図に描かれた「蝦夷地」のかたちよりは、このような刊行蝦夷図に描かれた「蝦夷地」のかたちこそが、彼らにとってはより身近なものであったことが想定できる。

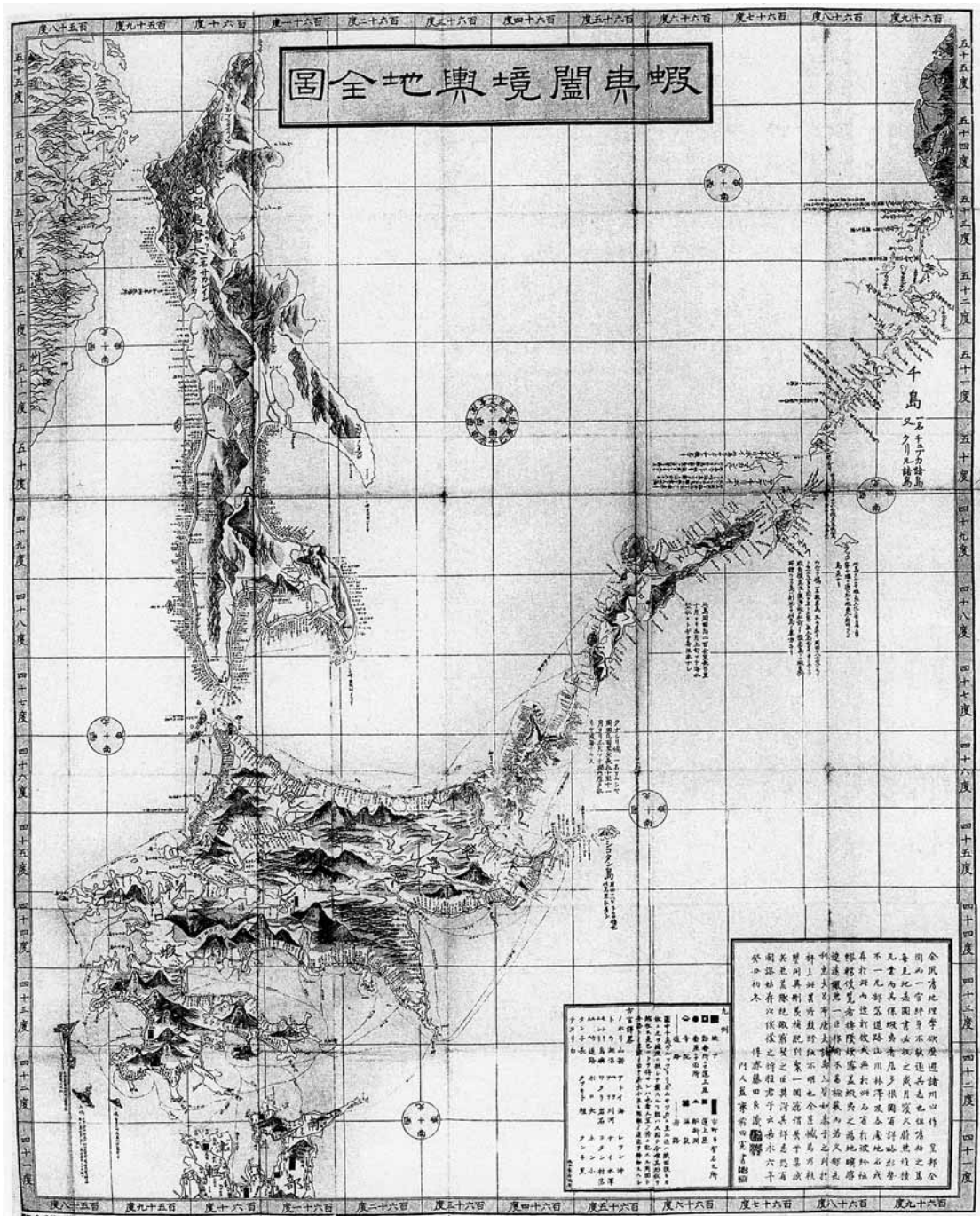


図1 嘉永7年(1854)刊行「蝦夷闔境輿地全図」

(秋月 (1999) 334 頁より)

しかし、本稿の目的から考えると、このような刊行図の「蝦夷地」像のみの分析では、十分とはいえない。近世日本において、果たして庶民層がどの程度、刊行日本図や刊行蝦夷図を見る機会があったのか、あるいは地図を購入していたのか⁽²⁾は不明な点が多い。そこで、より庶民層にまで普及していたと思われる節用集所載の地図を検討することで、さらに議論をすすめていく。

Ⅲ. 節用集所載の地図からみた「蝦夷地」像

近世日本では、知識人層だけでなく、庶民層にまで日常的に様々な場面で読み書きの能力が求められ、彼らの日本語運用のための辞書として節用集が普及した。本章では、近世日本における代表的な節用集の付録として掲載された地図を確認し、そこに描かれている「蝦夷地」のかたちについて検討する。

(1) 節用集所載の地図と社会的意義

本稿で利用した史料は、大空社発行の『節用集体系』全100巻である⁽³⁾。この全集は、国立国会図書館の亀田文庫から江戸時代の刊本を中心に年代順に編集されたものであり、節用集を集成した国内初の影印史料である。本全集には、近世の庶民史料である節用集の代表的なものが網羅されており、本稿の目的である節用集付録の地図を、一定の基準で長期間にわたって比較検討するうえで、最適の史料集であるといえる。

本史料の収録全巻の一覧を見ると、江戸時代前期（江戸時代以前のもも含む、元禄年間まで）29点、江戸時代中期（宝永年間～寛政年間まで）38点、江戸時代後期（享和年間～慶応年間）36点、明治期（明治42年まで）15点と時期区分され、それぞれの時期において代表的な節用集は網羅されている。

立岡（2013）は、本全集を利用して、近世における「地理」という用語の掲出状況を検討し、その際「地図」という用語についても確認している。それによれば、節用集において「地図」という語

彙がでてきたのは、1680年代以降であった。しかし、そこでは実際の付録としての地図類の掲載状況は分析されていないため、本稿ではこの点について具体的に検討する。

『節用集体系』全100巻の節用集のなかで、付録の地図が掲載されているものを挙げた（表1）。これによれば、日本図が掲載されている節用集は元禄3年（1690）刊行の『頭書大益節用集綱目』を初めとして、文久3年刊行の『江戸大節用海内蔵』まで22点の節用集である。このなかで日本図以外の地域図が掲載されている節用集は、元禄10年（1697）刊行の『頭書増字節用集大成』から、やはり文久3年（1863）刊行『江戸大節用海内蔵』まで17点ある。各図の掲載数をカウントすると、江戸図10点、京図9点、禁裏図2点、大坂図9点、鎌倉図・金沢図・江の島図・伊勢図が各1点である。世界図（万国図）は4点、蝦夷図・朝鮮図・琉球図・清朝図が1点である。

以上のように、掲載された種類の地図としては日本図が圧倒的に多い⁽⁴⁾。「日本」のかたちも、『大日本永代節用無尽蔵』所載「日本図」以外は、石川流宣の日本図に見られるような「行基式日本図」の系統である。一方、『大日本永代節用無尽蔵』所載「日本図」は、「流宣日本図」に見られる「行基式日本図」というよりは、どちらかという（現在の）東北地方部分が立ち上がった「赤水系日本図」のかたちである。ただし、いずれの地図にも経緯線はない。また、「蝦夷地」の部分については両日本図には似ていない（後述）。

その他の地域図は、いわゆる三都である江戸図・京図（禁裏図含）・大坂図が多かった。これが節用集読者である庶民層の知的欲求に対応したものであるとすれば、全般的に日本および三都への関心が高かったことが掲載地図の傾向でわかる。年代を見ると、日本図の初出は『頭書大益節用集綱目』の「日本之圖」であり、それ以降に刊行された節用集には、すべてではないものの、コンスタントに地図の掲載はある。また、年代を経るに従い、地図の種類にバラエティがでてきており、『江戸大節用海内蔵』では日本図・世界図だけで

表1 『節用集体系』にみる節用集所載の地図一覧

巻数	刊行年 和暦(西暦)	節用集のタイトル	地図の種類(掲載頁順)	日本図における「蝦夷地」表現の特徴
22	元禄3年 (1690)	頭書大益節用集綱目	「日本之圖」(南が上)	「舩ぞが嶋」 渡島半島の南端部分?
23-1	元禄7年 (1694)	頭書増補節用集大全	「日本之圖」(図2)	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
23-2	元禄10年 (1697)	頭書増字節用集大成	「日本之圖」, 京図, 江戸図, 大坂図	「舩ぞが嶋」 渡島半島の南端部分?
24-1	元禄12年 (1699)	頭書増補大成節用集	「日本之圖」, 鎌倉図, 金沢図, 江の島図, 世界万国総図	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
24-2	元禄13年 (1700)	頭書増補節用集大全	「日本之圖」	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
26-2	享保2年 (1717)	大國花節用集珍開蔵	「大日本國之圖」, 江戸図	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
27	享保2年 (1717)	大益字林節用不求人大成	伊勢図	
28-2	享保18年 (1733)	大富節用福寿海	「日本之圖」	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
29	享保18年 (1733)	悉皆世話字彙墨宝	万国図(人物図)	
31-2	宝暦2年 (1752)	永代節用大全無尽蔵	「日本国之圖」, 京図, 江戸図, 大坂図	「蝦夷」「松前」 渡島半島の南端部分?
35-2	明和6年 (1769)	百万節用宝来蔵	「大日本國之圖」, 京図, 江戸図, 大坂図	「蝦夷」「松前」 渡島半島の南端部分?
37-2	明和8年 (1771)	満字節用錦字選	「大日本國之圖」, 京図, 江戸図, 大坂図, 禁裏図	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
40	天明2年 (1782)*	万代節用字林蔵	禁裏図, 京図, 江戸図, 大坂図, 「大日本國之圖」	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
43	天明5年 (1785)	日本節用万歳蔵	「大日本國之圖」, 万国図	「蝦夷」「マツマヘ」 渡島半島の南端部分?
49-1	寛政11年 (1799)	大豊節用寿福海	京図, 江戸図, 大坂図, 「大日本國之圖」	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
50	寛政11年 (1799)	倭漢節用無双囊	「大日本國圖并属国」, 京図, 江戸図, 大坂図	「蝦夷 古ノ毛人国也」「松前」「エサシ」 渡島半島の南端部分
51	享和2年 (1802)	万宝節用富貴蔵	京図, 江戸図, 大坂図, 「大日本國之圖」(図3)	「舩ぞのちしま」「てしおふろ」「めなしふろ」「松前」 *「扶桑国之圖」系統か
57・58	文久3年 (1863)	江戸大節用海内蔵	「蝦夷全圖」(図4), 「大日本國略圖」, 朝鮮図, 琉球図, 万国図	日本図に蝦夷地の記述はなし
59-1	文化15年 (1818)	字宝節用集千金蔵	「大日本國之圖」	「舩ぞ」「まつまへ」 渡島半島の南端部分?
63	文政9年 (1826)	倭節用集悉改大全	京図, 江戸図, 大坂図, 「大日本之圖」	「松前」「箱立」 渡島半島の南端部分
73・74	嘉永2年 (1849)	大成無双節用集	「大日本國圖」	「蝦夷」「マツマヘ」 渡島半島の南端部分?
75・76	嘉永2年 (1849)	大日本永代節用無尽蔵	世界万国図, 日本図	渡島半島の南端部分? 文字は不明瞭
77・78	嘉永3年 (1850)	万代節用集	「大日本國全圖」・清朝図	「松前」 渡島半島の南端部分
79	嘉永頃	永代節用集	「大日本國全圖」	「松前」 渡島半島の南端部分

* 寛政7年(1795)補刻

『節用集体系』大空社より作成

なく、朝鮮図・琉球図・蝦夷図⁵⁾なども掲載されていることが特筆される。

近世節用集に関する研究は膨大に存在するが、本稿に関わる論点として、節用集の展開と付録の近世社会における意義についておさえておく。

節用集の辞書史としての展開について論じている佐藤(2015b)によれば、節用集の展開は「室町期の古本節用集」「近世的典型の形成期」「日用教養記事を付録していく教養書化期(1700年ごろ以降)」「早引節用集に端を発する検索法開発期(1750年ごろ以降)」「早引節用集と大型本による二極化期(1800年ごろ以降)」「近代」と大略六期であるとしている。つまり、『節用集体系』において日本図が付録として初出する元禄年間、節用集の展開としては「近世的典型の形成期」にあたる。これは節用集の近世化としての「付録の巻頭配置と図画挿入」という点で、『節用集体系』のみではなく、節用集全体の傾向として位置づけられるといえよう。

また、これら付録の意義として、日本史学の横田(2006)は、庶民層への「参照系の知」の普及を指摘している。このような節用集付録にみられる知識は、急速に元禄期以降、庶民によって求められるようになったこと、また、元禄年間は、これらの知識を求める人々の裾野が急速に庶民層まで拡大し、知識の共有が進んだ時代でもあったとされる。つまり、節用集付録の日本図の参照を通して、庶民は「日本」という領域を、具体的なイメージとして理解することになったといえる。

ところで、これら節用集の作者はどのような人々だったのだろうか。この問いには、節用集を日本文明との関わりで論じた横山(1984)による「節用集の出版と流布」に関する見解が参考になる。節用集の作者は、「思想史や高踏的な文学史に名が出るような人物ではなく、むしろ江戸前期以前では僧職が多く、後期では往来物、女訓や重宝記などの啓蒙書、あるいは戯作などを手掛けたもの」であり、「彼らは、知識層とそうでない人々との接点であり、知識を簡略化し普及させる媒介者」であった。さらに版元も、江戸の須原屋や大坂の

河内屋、京都の山城屋など著名な版元であり、売捌所も各地にあったため、三都はもちろん、多くの節用集が地方にも普及していた可能性は高い。

たとえば、節用集所載の日本図をもとに、実際に日本図を描いた事例として、ロシアにおける大黒屋光太夫によって作製された日本図は興味深い。大黒屋光太夫は、伊勢国白子村の船頭であり、天明2年(1782)に紀州藩の積荷を江戸へ運ぶために出帆、その後駿河沖で遭難、アリューシャン列島へ漂着した。その後、カムチャツカ半島からイルクーツクを経て、当時のロシア帝国の首都であるサンクトペテルブルクへ到着した。大黒屋光太夫がロシアで描いたとされる日本図5枚の現存が確認されている。

この大黒屋光太夫が作製した日本図に関しては、その粉本について諸説あるが、岩井(1994・2000)は、享保14年(1729)発刊の『広大節用字林大成』掲載の日本図の系統であろうと結論づけている。大黒屋光太夫の描いた日本図は、そのかたちや地名の書き方などは「流宣日本図」系統(「行基式日本図」)ではあるが、「蝦夷地」の描き方をみると、いわゆる「扶桑国図」系統の図である。

このタイプの地図が実は多くの節用集に掲載された日本図である(後述)ことから、『広大節用字林大成』のものを本当に利用していたのかどうか、光太夫の生きていた年代には、さらに後年に刊行された新しいバージョンの節用集を用いていたのではないか、という点についての疑問は残るものの、岩井(2000)による詳細な地名考証の分析から、大黒屋光太夫が節用集付録の日本図を参照していたことにほぼ間違いのないと思われる。つまり、庶民である大黒屋光太夫の「日本」像は、節用集所載の日本図に大きな影響を受けていたのである。

以上のことから、節用集における「日本図」の掲載は、これらを利用したであろう庶民層への「日本」像の理解、それに付随した日本意識の普及に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

(2) 節用集所載の地図から見た「蝦夷地」像の変遷

『節用集体系』のなかの節用集所載の日本図のなかで、「蝦夷地」のかたちの特徴はどのようなものだったのか、さらにどのように変化したのか。実のところ、各日本図を見ると、地図のなかにはっきりと独立したかたちで「蝦夷地」が描かれているものはない。しかし、北東部分に横たわる陸地の上にそれぞれ地名が記されているものや地図の北方部分に渡島半島の南端部分らしき陸地が描かれるものがある。各日本図での描き方について確認する（表1参照）。

『頭書大益用節用集綱目』所載「日本之圖」は、南が上、そのため地図の左下隅に「ゑぞが嶋」と記入された陸地の一部分が描かれている。南が下の地図は、『節用集体系』の他の節用集付録の地図には見られない。しかし、『頭書増字節用集大成』所載「日本之圖」も、北が上ではあるが、「ゑぞが嶋」と記入された陸地の一部分が地図の右上隅に描かれており、両者の「蝦夷地」のかたちはよく似ている。

ところで、南が上の刊行日本図が珍しいというわけではなく、前者の日本図のように、南が上の刊行日本図は存在した。たとえば、寛文年間頃の刊行とされる「大経師加兵衛版日本図」や延宝6年（1678）刊行の「大日本図鑑」であり（秋岡1955）、特に『頭書大益用節用集綱目』所載の日本図は、そのかたちなどから、「大日本図鑑」の影響を受けていることがうかがえる。刊行年を確認すると、『頭書大益用節用集綱目』は元禄3年（1690）刊、「大日本図鑑」は延宝6年（1678）刊なので、『頭書大益用節用集綱目』の作者は、これらの刊行日本図を参照することができたと思われる。しかも、「大日本図鑑」は、大坂が版元のものと同版元不明のものを含めて数版の出版が確認されている刊行図であり、広く社会に流通していた可能性が高い刊行日本図である（秋岡1955）。

ここで、節用集所載の日本図における「蝦夷地」のかたちを分類し、それをもとに近世日本におけ

る代表的な刊行日本図からの影響を考察していく。

まず、『節用集体系』の節用集所載「日本図」のなかの「蝦夷地」表現としてもっとも多いのは、寛文2年刊行の「扶桑国之圖」に描かれた「蝦夷地」のタイプである。これは、地図の右側、北東部分に横たわる陸地の上に、「まつまへ」「てしをふろ」「ゑぞのちしま」「めなしふろ」などの地名が書き込まれているものである。『節用集体系』所載の節用集には、この「扶桑国図」タイプの「蝦夷地」表現がもっとも多く、表1を見ると、『頭書増補節用集大全』（図2参照）、『頭書増補大成節用集』、『頭書増補節用集大全』、『大國花節用集珍開蔵』、『大富節用福寿海』、『満字節用錦字選』、『万代節用字林蔵』、『大豊節用寿福海』、『万宝節用富貴蔵』（図3参照）と9点にのぼる。節用集に付録がつくようになってからの元禄年間から享和2年（1802）のおよそ100年間、つまり、節用集所載の地図では、19世紀の初めまで「扶桑国図」に描かれた「蝦夷地」表現が生き続けていたのである。前節で述べた大黒屋光太夫の描いた「蝦夷地」も、そのかたちから、この「扶桑国図」系統の「蝦夷地」表現であると思われる。

菊田（2004）は、節用集は先行節用集の収録語を踏襲する部分が大きく、付録の地図にもこのような「守旧性」があることを述べている。この節用集所載の地図に見られる「蝦夷地」像の「守旧性」も、情報が更新されない、節用集の読者にとっては最新の情報を得ることができないという意味ではマイナスであるかもしれない。しかし、一方で、節用集を手にするのできた庶民層の多くの人々にとっては、この「蝦夷地」像こそが、もっともなじみ深い「蝦夷地」像であったともいえる。

「扶桑国図」の「蝦夷地」タイプほどではないものの、次に多かった分類としては、地図の北方部分に渡島半島の南端らしき部分が描かれ、そこに「蝦夷」「松前」（「マツマヘ」）と書き込まれているものである。『永代節用大全無尽蔵』、『百万節用宝来蔵』、『日本節用万歳蔵』、『字宝節用集千金蔵』、『大成無双節用集』などである（表1参照）。これは、刊行日本図の影響という点で考えてみる

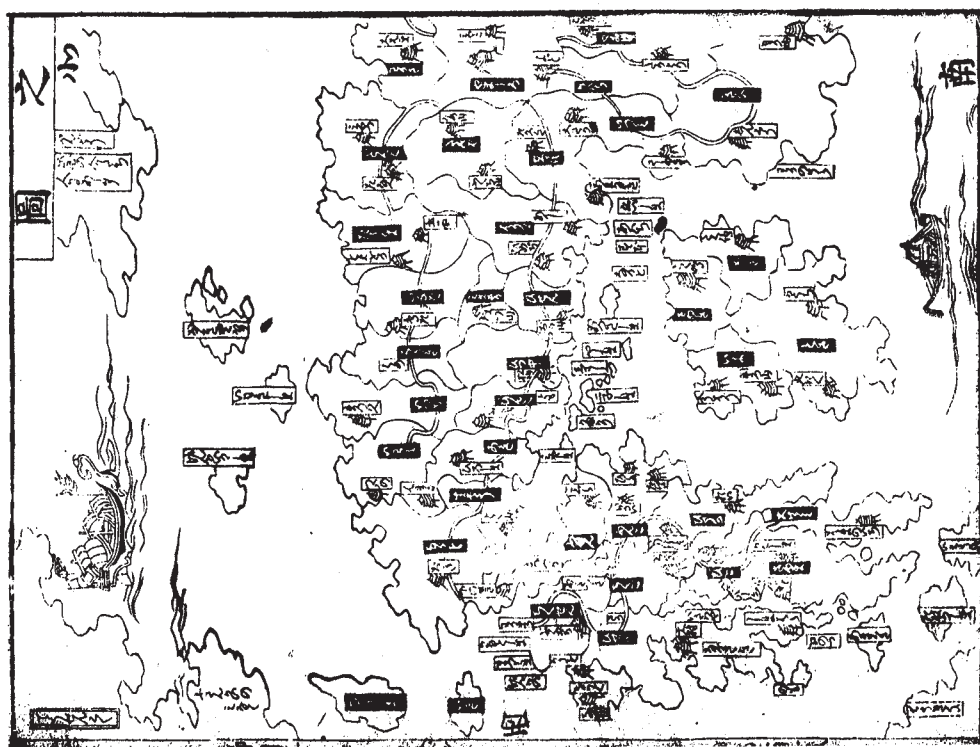
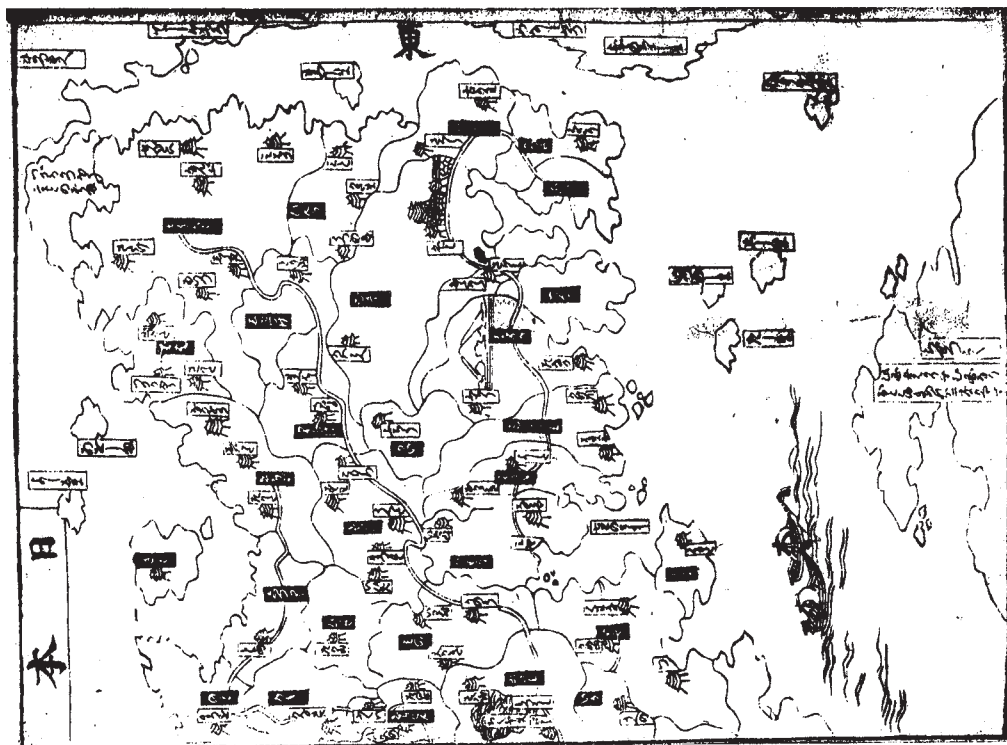


図2 『頭書増補節用集大全』所載 日本図

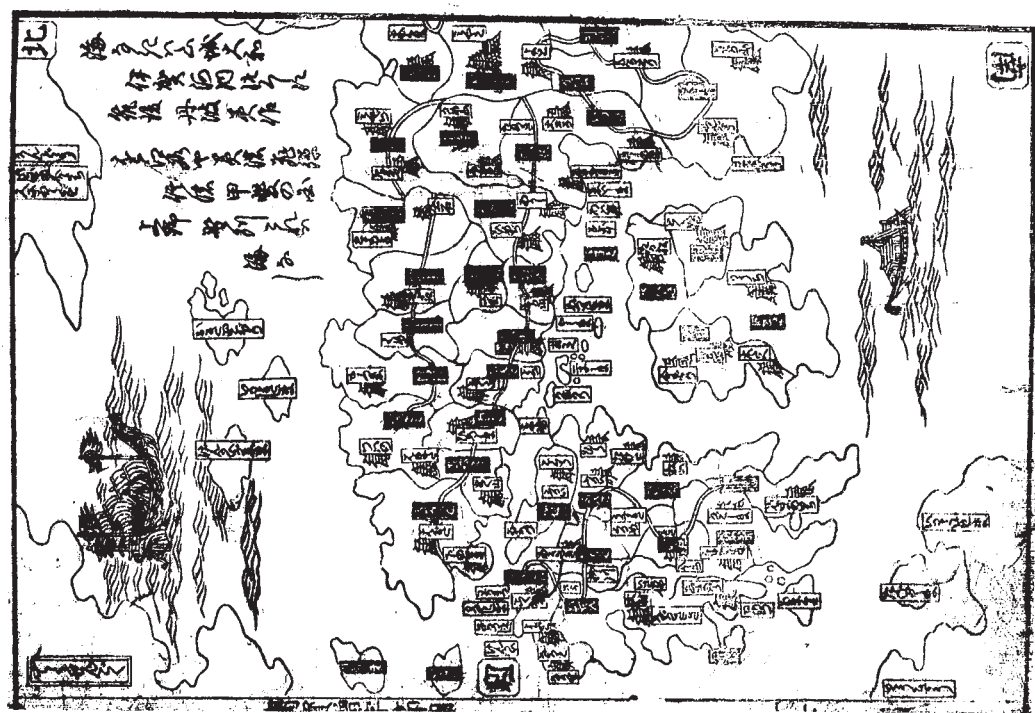
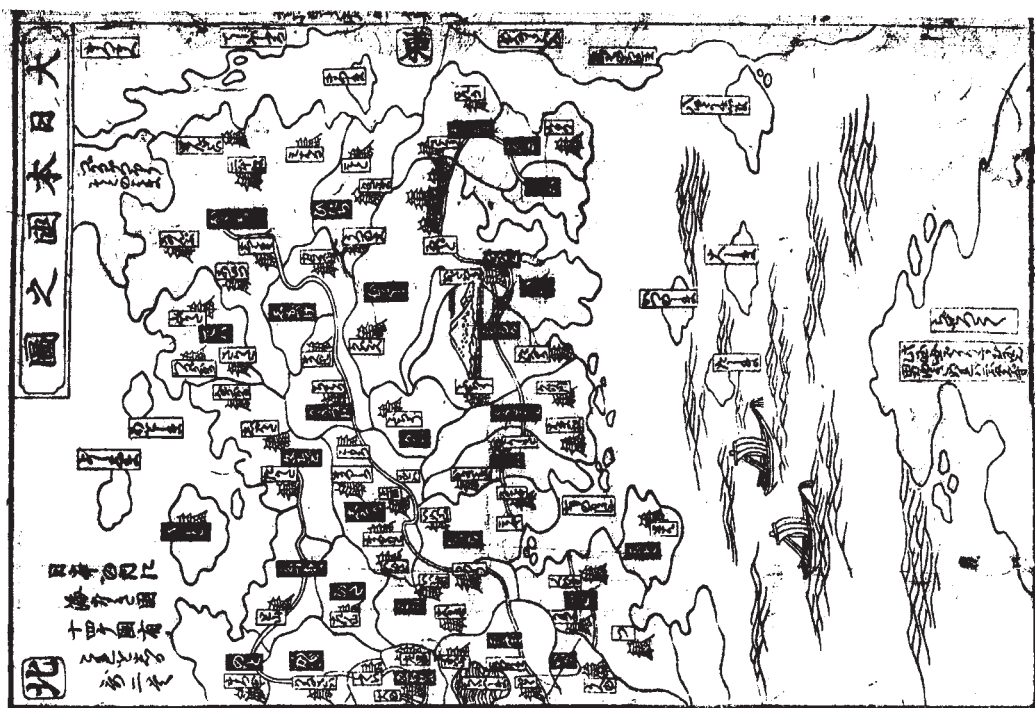


図3 『万宝節用富貴蔵』所載 日本図

と、前述した「流宣日本図」や「赤水日本図」の日本のかたちには似ているものの、「流宣日本図」における「夷狄」と「松前」の描き方を比較すると、その「蝦夷地」の描き方はまったく似ていない。しかもこれらの地図の「蝦夷地」の描き方はとても単純で、そもそも何か地図を模写しなければ描けない表現とも言えず、それでは具体的にどの刊行日本図の影響を受けているのかどうかという点では不明である。やはり菊田（2004）の指摘する「守旧性」で考えれば、いずれかの先行節用集の図を踏襲したため、このような表現になったと思われる。

ところで、節用集所載の地図のなかで、「蝦夷図」として単独で掲載されているのは、文久3年刊行の『江戸大節用海内蔵』の「蝦夷国図」（図4参照）のみである。前述した日本図のケースのように、やはり節用集所載の地図がオリジナルとして描かれたというよりは、江戸時代に刊行された代表的な刊行蝦夷図を模写している可能性が高い。そこで、この「蝦夷国図」が参照したと思われる刊行蝦夷図を探してみると、その「蝦夷地」のかたちから、前述した「蝦夷闔境輿地全図」（図1参照）の系統と考えられる。このタイプの刊行蝦夷図は、増刷されて大量に出回ったことが確認されており、しかも他にもよく似た地図が同時期にいくつか刊行されたため（秋月1999）、おそらくその刊行図は容易に入手できたと思われる。しかし、「蝦夷地」の表現はよく似ているものの、刊行図の「蝦夷闔境輿地全図」にある経緯線や識語、沿岸部にびっしりと書き込まれた詳細な地名などは、節用集所載の本図にはまったく記されていない。

『江戸大節用海内蔵』は、文久3年の刊行ではあるが、明治27年（1894）東京の博文館編輯局刊行の『傳家寶典 明治節用大全』の例言に「高井蘭山⁽⁶⁾の江戸大節用を編輯するや、其實永元年の元板に就き、天保四年より文久三年まで、三十餘年を経て初めて成り」とあるように、30数年かけて編纂されたという江戸時代を代表する大型の節用集であり、各家庭においては、明治期も利

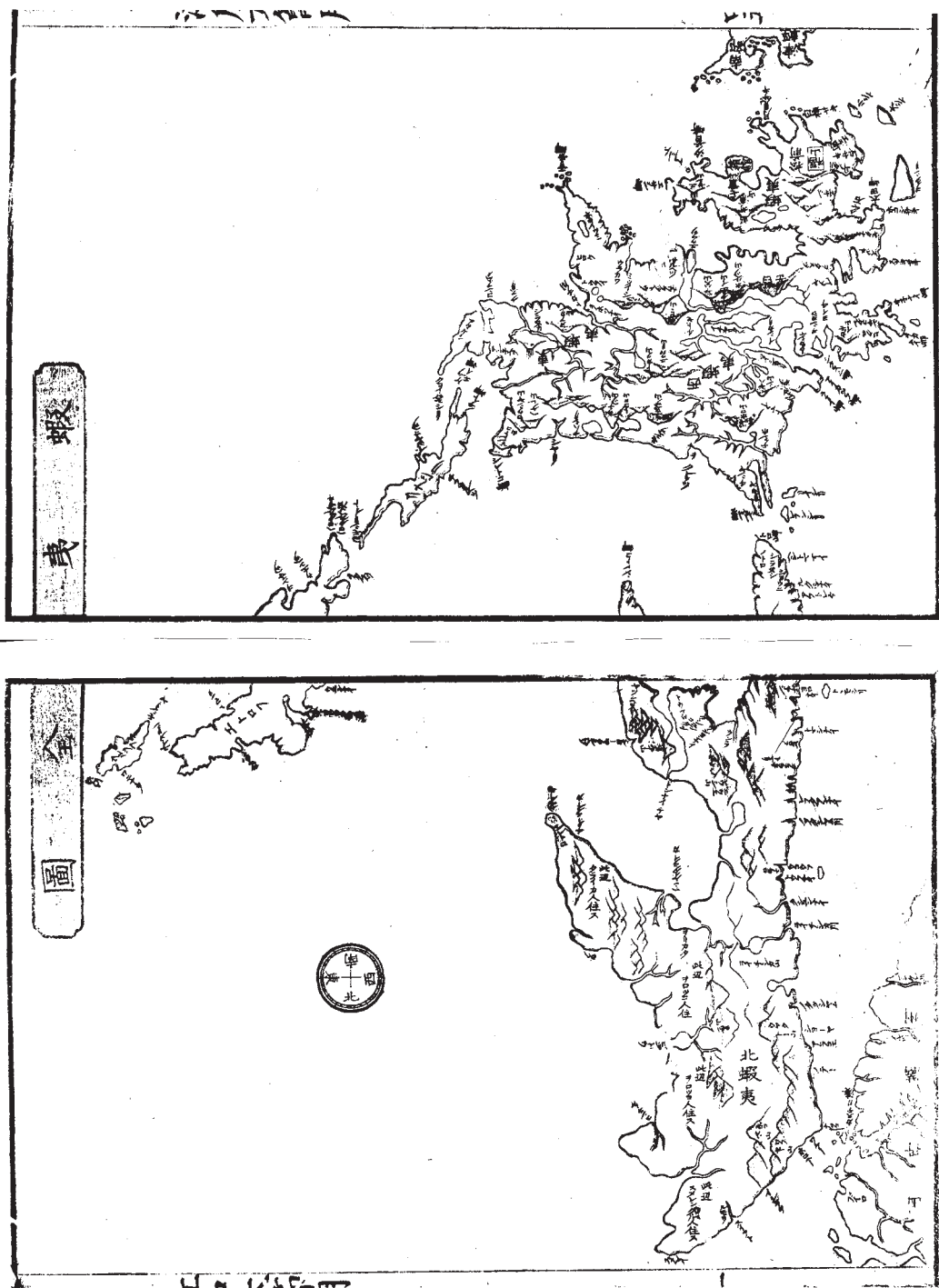
用され続けた。

横山（1984）はこのタイプの節用集を「日用百科事典としての節用集」と位置づけ、その記載事項の総合性や色刷りの豪華さなどから、江戸の『江戸大節用海内蔵』と上方の『大日本永代節用無尽蔵』の二冊が、江戸時代の代表的な節用集であるとしている。この「日用百科事典としての節用集」の内容は、二つに分類できる。「一つは、読者に自分がどのような国や身分、あるいは時代に属しているのかを知らせる部分。これは彼らに。自意識あるいは自己のアイデンティティを形づくらせる情報を与えるものである。いま一つは、読者が日々の暮らしを営むにあたって知っておくべき、あるいは知っておくと便利なことがらを記した部分」（横山1984）とされ、この場合、日本図や世界図などの地図は、この前者の部分に属し、まさに読者の「自意識」「自己のアイデンティティ」としての地理的認識をかたちづくる重要な要素であったと考えられる。

さらに、自己があれば他者が存在する。近世を通して、「蝦夷地」は自己としての「日本」に對した「他者」であり、この地理的認識は、明治2年に「蝦夷地」が「北海道」になった後も、節用集所載の地図などを通して、庶民層の間で長らく生き続けた可能性があることも否定できない。

IV. 結語

江戸幕府側の作製した日本図や蝦夷図は、明治2年の「北海道」への改名以前に、すでに最新の情報を駆使し、まさに近代的な測量図として正確なかたちに近づいていた（米家2015a・2015b）。しかし、刊行日本図や刊行蝦夷図などの一枚物の出版地図においては、最新の「蝦夷地」情報はすぐには反映されず、従来の地図が繰り返し模写され続ける状況が続いていた。たとえば、筆者がBタイプと分類した刊行蝦夷図は、江戸幕府系の地図にある正確な「蝦夷地」のかたちではなく、人々の様々な実用に即したものとして流通した地図であり、そのような地図が幕末日本において多くの



版を重ね、かつ同様のタイプの地図が刊行された。

さらに、節用集所載の日本図においては、寛文年間に刊行された「扶桑国図」が、18世紀から19世紀の100年近くにわたって繰り返し模写され、利用されており、まさに旧態依然とした「蝦夷地」像が民間に長らく流布していたと考えられる。そして、これこそが近世日本の庶民層のもつ「蝦夷地」像にもっとも影響を与えた可能性が高いといえる。

しかも幕末の代表的な節用集である『江戸大節用海内蔵』においては、新しい「蝦夷地」のかたちとして、「蝦夷国図」が掲載された(図4参照)。しかし、ここで描かれた東西に扁平なかたちをした「蝦夷地」像も、江戸幕府が得ていたような最新の「蝦夷地」情報からはほど遠いうえに、さらに明治期になってからも、広く庶民層に受容されていたことが推察できる。

従来の地図史研究において、近世日本における地図の発展は、中世的な「行基式日本図」に代表される日本像から、近代的・科学的地図の前史である近世的日本像への転換、という図式で語られていたといえる。しかし、これは、あくまで、江戸幕府が作製した最新の地図情報を入手できる高名な思想家・知識人層の作製した地図にもとづいた日本像に当てはまるものであり、近世の庶民層にまで浸透していた日本像とまでは言い難いのではないだろうか。

そして、これは近世日本に生きた人々にとっての「蝦夷地」の地域像を明らかにするためには重要な論点である。上述の庶民の日本像のあり方は、直接に「蝦夷地」という地域像とつながると考えられるからである。江戸幕府や知識人層が作製した当該地域の地図や地域情報はあくまで最先端の科学的なものを追求していた。一方、近世の庶民層の「蝦夷地」像は、長い間、「扶桑国図」や「流宣日本図」のようなものであり、幕末になってもなお、旧態依然とした「蝦夷地」像であったのである。このような、「蝦夷地」をめぐる知識人層と庶民層の地理的認識のずれが、近代以降、「蝦夷地」が「北海道」になったことによってど

のように解消されていくのか。あるいは近代以降も知識人層と庶民層の間には、この「近世」的な地理的認識のずれは残ったままだったのか。そして近世から近代の日本北方地域の地域像はどのようなものだったのか、については今後のさらなる研究課題としたい。

[付記]

本稿で利用した文献・史資料の収集には、平成25～27年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「19世紀フロンティアの地域像に関する日露比較研究」(研究代表者・米家志乃布)を使用した。

注

- (1) 古川古松軒(1726-1807)は、備中生まれ、江戸時代の地理学者で、天明8年(1788)に幕府の巡検使に同行して、現在の東北地方から北海道まで視察にいった。その時の記録をまとめたものが『東遊雑記』という紀行文である。『東遊雑記』のなかでは、林子平の『三国通覧図説』やそのなかの「蝦夷全図」の記載について、蝦夷地での見分中に細かく批判していることが注目される。
- (2) 小野田一幸(2014)「地図の値段」(三好・小野田『日本古地図コレクション 新装版』)では、江戸時代の出版書籍の目録である『書籍目録』から刊行図の値段を拾い出し、元禄9年(1696)、宝永6年(1709)、正徳5年(1715)と比較している。その表を見ると、「日本之図」(貞享5年と元禄2年刊行の「本朝図鑑綱目」)の値段は2匁であり、値段に変動はない。「世界之図」は5匁、各地域図(大坂図や内裏図など)は1匁3分～5分である。同時期の物価と比較すると、およそ米1kgや日雇いの日当と同じ程度であるという。
- (3) 大空社発行の『節用集体系』は第1期(1993)、第2期(1994)、第3期(1994)、第4期(1995)、第5期(1995)と合計100巻の江戸時代を代表する節用集の刊本が集成されている。
- (4) 柏原司郎は、その著書『近世の国語辞書 節用集の付録』(柏原2013)において、国会図書館蔵本と著家蔵本の節用集を合わせて、「刊本節用集の付録事項一覧稿」を作成している。その一覧を見ると、「日本全図」84点、「世界の図」27点、「世界万国人物図」13点、「大坂の図」54点、「京都全図」52点、「江戸全図」51点の節用集に掲載があることが判明している。
- (5) 「刊本節用集の付録事項一覧稿」(柏原2013)

によれば、節用集の地図としての蝦夷図掲載は、『江戸大節用海内蔵』のみである。「蝦夷（人）」の図としては11点の節用集が掲載している。

- (6) 高井蘭山(1762-1838)は、江戸の戯作者・読本作者。その著書・編著・校訂書は100点以上にのぼる。蘭山の評価は、当初は「雑学」「雑家」、すなわち「雑学者」として江戸の出版界に登場し、その後、戯作にも手を染め、江戸の戯作文学においても多大な影響を与えたという(澤登2001)。

参考文献

- 秋岡武次郎(1955):『日本地図史』河出書房新社
 秋月俊幸(1999):『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道出版企画センター
 岩井憲幸(1994):「新出の大黒屋光太夫筆日本図について」『明治大学教養論集』269
 岩井憲幸(2000):「ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について」『明治大学教養論集』328
 上杉和央(2007):「日本図の出版」京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年—京都・日本・世界』ナカニシヤ出版
 上杉和央(2015):『地図から読む江戸時代』筑摩書房(ちくま新書)
 海野一隆(1999):『地図に見る日本—倭国・ジパング・大日本』大修館書店
 織田武雄(1974):『地図の歴史—日本篇』講談社新書
 柏原司郎(2013):『近世の国語辞書 節用集の付録』おうふう
 菊田紀郎(2004):「近世節用集」『日本語学』23-12
 金田章裕・上杉和央(2012):『日本地図史』吉川弘文館
 米家(山田)志乃布(2002):「一九世紀の地図作製と『蝦夷地』—北上する〈日本〉」『地理』47-2
 米家志乃布(2012):「地図から見る日本意識の変遷と『蝦夷地』」『国際日本学』9号
 米家志乃布(2015a):「人びとにとっての近世日本のかたち」田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』笠間書院
 米家志乃布(2015b):「近世日本図の北辺:『蝦夷地』表象」『文学』16-7
 佐藤貴裕(2011):「節用集と近世社会」金澤裕之・矢島正裕『近世語研究のパースペクティブ』笠間書院
 佐藤貴裕(2012):「近世節用集書名変遷史考—字数と基称—」『国語語彙史の研究』31
 佐藤貴裕(2015a):「節用集の辞書史的研究の現況と課題」『日本語の研究』11-2
 佐藤貴裕(2015b):「節用集展開史の後景」『文学』16-5
 澤登寛聡(2001):「高井蘭山と『農家調宝記』」高井蘭山著・澤登寛聡編『農家調宝記』岩田書院
 高木崇世芝(2011):『近世日本の北方図研究』北海道出版企画センター
 立岡裕士(2013):「近世節用集における『地理』の掲出状況」『鳴門教育大学研究紀要』28
 谷本晃久(2015):「近世の蝦夷」『日本歴史 近世四』岩波書店
 船越昭生(1976):『北方図の歴史』講談社
 古川古松軒(2003):『東遊雜記 奥羽・松前巡見私記』平凡社
 ポロヴニコヴァ・エレナ(2013a):「近世庶民の自己認識—節用集の人物図を資料として—」『文芸研究』176
 ポロヴニコヴァ・エレナ(2013b):「近世庶民の『世界』像—節用集の世界図を中心に—」『日本思想史研究』45
 三好唯義・小野田一幸(2014):『図説日本古地図コレクション 新装版』河出書房新社(初版2004)
 横田冬彦(2006):「近世の出版文化と〈日本〉」酒井直樹編『歴史の描き方①』東京大学出版会
 横山俊夫(1984):「節用集と日本文明」梅棹忠夫・石毛直道編『近代日本の文明学』中央公論社
 横山俊夫(1990):「日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について」『人文学報』66

The Representation of *Ezochi* in Privately Printed Japanese Maps during the Edo Period

Shinobu KOMIIE

Abstract

Between the seventeenth and nineteenth centuries, Hokkaido (the northernmost island of Japan) was divided politically into two areas: *Wajinchi*, the Japanese area, and *Ezochi*, the area reserved for the indigenous Ainu. This paper examines how *Ezochi* was viewed by the common people of Japan, during the Edo period.

In the context of Japanese historical cartography of *Ezochi*, many geographical researchers have discussed the development of the scholars of understanding *Ezochi* by Japanese political power (Tokugawa shogunate and Matsumae domain) between pre-modern and modern. However it is important to consider the difference between the scholars and common people when analyzing geographical knowledge of Japan's history.

This paper demonstrates that *Ezochi* was misrepresented on the maps published by private mapmakers, and in encyclopedias published for the common people living Edo, Osaka, and Kyoto during the Edo period.

In the nineteenth century, the Tokugawa shogunate provided the first accurate map of *Ezochi*, following the survey of the areas' coastline by Ino Tadataka. The shogunate did this because they wanted to include *Ezochi* in Japanese territory.

Private mapmakers and publishers in Edo, Osaka, and Kyoto continued to publish various printed maps of Japan and *Ezochi*. The representation of *Ezochi* was not updated on most privately printed maps. Additionally, maps of Japan and *Ezochi* that were printed after the survey was conducted continued to rely on incorrect information taken from old maps. In some encyclopedias, *Ezochi* was represented on a '*Fusokokuzu*' (a type of Japanese map used in the seventeenth century), and these representations have had a major influences on the image of *Ezochi* held by the common people during the Edo period.

Keywords: Hokkaido, mapping *Ezochi*, Tokugawa shogunate, published maps of Japan, Edo period